



障害児学校部ニュース⑩

2026 年 1 月 10 日(土)

広島県内の障害児学校にお勤めのみなさん、新年あけましておめでとうございます。

2026 年は午年。馬は寂しがり屋で仲間を大切にする生き物なのだそうです。私たちも、職場の仲間を大切に、組合活動の意義を一人でも多くの方に理解してもらいながら、組合につながる仲間を増やしていければと思っています。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

12 月 14 日(日)に全国障害児教育部長会議が東京で開催され、行ってきました。

「別学(分離)を正当化する議論を解きほぐす」と題して、中央大学の池田賢市先生の講演がありました。先生によると、ここ 5 年～10 年の間に、大学生の意識が急速に変化していると感じるそうです。

障害者や在日外国人などが置かれている現実を知らないまま、「優遇されている」とか、「日本に居て困ることがあるなら、なぜ日本を出ていかないのか」などという見方をする学生が非常に増えているようで、この感覚が「日本人ファースト」のようなスローガンに飛びついていくのではないかと言われていました。

池田先生は、『求められる学力』とよく言われるけれど、誰が求める学力なのでしょうかと投げかけます。結論から言えば、今の日本の学校教育は経済界から求められる学力をつけるという方向で動いている。学ぶことは基礎学力を習得することであるという思い込みの中で。特別支援学校で言えば、分けられた生徒たちをさらに分けて、社会（経済界）に必要とされる訓練をしていく。経済成長に役立つ訓練を受ける場所が学校教育になってしまっていないかと言われました。

私が一番印象に残ったのが、「競争的環境の克服を」という話です。

社会がインクルーシブな状態であるためには、「競争的環境」ではなく、相互扶助の発想が大切なはずですが、学校はあらゆる側面で「競争」に勝ち抜くことを価値としている。一見「競争」とは無関係に見える実践の背後にも隠されているということです。例えば「できる」かどうかではなく、その子がどれだけ「がんばっているか」が重要だという考えについても、先生は警鐘を鳴らします。（私は自分のことだと思ってドキッとしました）この発想についても、「がんばっている度合い」を競争していることになってしまっていないか。他者から「がんばっている」と認められなければ「がんばっている」ことにならない。そういう中で子どもたちは教員に対して、いかにがんばっているかをアピールする方法を考えていくようになってしまう。

できることがなくても「自分は自分でいいんだ」という価値観が重要だと先生は言われました。多様性の尊重とは、どんな子にもいいところがあるということを確認する意味ではなく、存在そのものの承認だと。

最後に先生は、「多様性」とは、「わからないこと」がたくさんある状態であり、わからないからこそ子どもの声を聞いてみなければならないのだと言われました。つまり、学校をインクルーシブな空間にするには「おしゃべり」を活発に行うことが大切とのこと。放課後の職員室で人一倍おしゃべりをしている私は、最後のこの話を聞いてほっとしたのでした。

皆様にとって、良き 1 年でありますように…！

